

<原著論文>

[学生の精神衛生研究班]

大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴について の検討 (3)

都 筑 学 早 川 宏 子
宮 崎 伸 一 村 井 剛
早 川 みどり 金 子 泰 之
永 井 暁 行 梁 晋 衡

Investigation about Types of College Life Perspective and Their Psychological Characteristics (3)

Abstract

This study aimed to examine the extension to which different types of college life perspective contributed to develop basic social skills which would be needed in work places after graduation from university. The participants were 921 undergraduate students in Chuo University. They were asked to complete a sheet of questionnaire which consisted of the following items; college life perspective, the degree of time use satisfaction in daily life, the orientation toward critical thinking, communication skill, hardiness, self efficacy, and time perspective. Using cluster analysis with scores of 17 college life activities, six different types of college life perspective were extracted; virtual activity group, activity stagnation group, in-class study group, independent out-of-class study group, highly active group, and personal relation group. The students of these six groups indicated quite different level of social skills. Virtual activity group showed almost lowest scores in social skills, and personal relation group did almost highest scores. Students who belong to sports club and student's circle showed higher score in communication skill, and sports club did higher score in critical thinking and hardiness. Based on these findings, functions of college life perspective on forming social skills in undergraduate students were discussed.

1. 問題と目的

本研究は、大学生生活をいかに過ごすかによって、どのような能力が獲得されるのかを検討し、大学生生活の過ごし方のタイプによる差異を明らかにしようとするものである。

われわれは、これまでに2つの調査研究を通じて、大学生における学生生活の過ごし方には異なる特徴を持つタイプが存在することを明らかにしてきた。都筑ら(2011)では、大学生生活の過ごし方尺度(溝上, 2009)を用いて、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」の3因子を抽出し、クラスタ分析によって、限定的対人活動群、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群、全般的活動群という6つの異なるタイプの学生がいることを明らかにした。さらに都筑ら(2012)では、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学での授業・勉強」の4因子を抽出し、クラスタ分析によって、活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群の6つの異なるタイプを明らかにした。

これらの学生のタイプは、大学生活に対して、それぞれ違った意味を見出し、1日24時間という制約の中で自分のやりたい活動を振り分けているのである。学生たちは、さまざまなことに関心を持ちながら大学生活を送っている。全国私立大学連盟学生委員会(2011)によれば、大学生活の中で興味・関心のあること(2つまで選択可)は、「大学の勉強」(22.9%),「クラブ・サークル活動」(21.9%),「資格の取得」(20.4%),「就職活動」(15.8%),「友人との交際」(13.7%),「アルバイト」(11.2%)であった。

東京大学大学経営・政策研究センター(2007)の全国大学生調査によれば、大学生が在学中の目標として重要であると考えているのは、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」(82.7%),「自分の将来の方向を見つける」(79.3%),「専門分野の知識・理解を深める」(76.3%),「広い教養、ものの見方を身につける」(75.4%),「有意義な人間関係を築く」(75.1%),「社会人になるまでの時間をエンジョイする」(58.0%),「資格試験・公務員試験などに合格する」(51.0%)であった。國眼・松下・苗田(2005)は、大学生活において最も大切にしていること(2つまで選択可)を検討し、「豊かな人間関係を築くこと」(34.8%),「将来へ向け知識や技術を身につけること」(28.7%),「勉強も楽しみもほどほどに経験する」(17.4%),「教養を高める」(13.9%)という結果を得ている。

これらのことからわかるように、学生たちにとって、現在自分が取り組んでいる大学の勉強やクラブ・サークル活動、友人たちの交際は無論大事なことであるが、それと同時に、大学卒

業後の将来の仕事に役立つような能力や知識、技術を身につけることも大事であると考えているのである。高等教育のユニバーサル化の時代を迎えて、同世代の半数以上が大学卒業時点で、初めて学校から社会への移行を経験することになる。そうした状況の中で、社会に出て行ったときに必要とされる力を大学時代に身につけておくことは重要な課題であるといえる。経済産業省(2006)は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」を位置づけている。社会人基礎力とは、①前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)、②考え抜く力(課題発見力、計画力、創造力)、③チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)という3つの能力から構成されるものである。

大学から社会へと移行し、新しい環境の下で行動していく際には、他者との関係を調整していくようなコミュニケーション能力や批判的・論理的に物事を考えていく思考力(クリティカルシンキング)が求められるであろう。また、それまでに体験したことのない事象に対して積極的に取り組んだり、ストレスを乗り越えたりしていく力も求められるであろう(ハーディネス)。さらには、時間管理をしっかりとおこない、計画的に物事を進めていくことも必要であろう。これらの能力は、大学生生活の活動の中で獲得されていくものであり、その水準は、どのように大学生生活を過ごすかということによって異なってくると考えられる。

以上のことから、本研究では、次の2点を明らかにすることを目的とする。第1は、これまでの研究と同じように、大学生生活の過ごし方尺度(溝上, 2009)を用いて、大学生生活の過ごし方のタイプを抽出し、それらのタイプによって、大学卒業後に必要とされるコミュニケーション能力、クリティカルシンキング、ハーディネス、計画性・時間管理の獲得、自信や将来の見込み(自己効力感や将来への希望)の程度に差異が認められるかどうかを検討する。第2に、体育連盟に所属する学生、サークルに所属する学生、部活動・サークルに所属しない学生において、大学卒業後に必要とされるコミュニケーション能力、クリティカルシンキング、ハーディネス、計画性・時間管理の獲得、自信や将来の見込み(自己効力感や将来への希望)の程度に差異が認められるかどうかを検討する。

[都筑 学]

2. 方 法

2.1 調査対象

調査対象者は、中央大学の多摩キャンパスに在籍する学生921人（平均年齢20歳9ヶ月、標準偏差7ヶ月）である。

対象者の性別は、男522人、女397人、不明2人だった。男女比は約1.3:1だった。全学（理工学部を含む）の男女比は2:1であり、その数字と比べてみると女子の割合が高かった。

学年の内訳は、1年495人、2年220人、3年119人、4年84人、不明3人であり、1年生が約半分を占めていた。都筑ら（2011, 2012）の調査と比較してみると、上級学年の学生の割合が多くなっていた。

学部の内訳は、法456人、経済132人、商207人、文110人、総合政策12人、不明4人であり、法学部が半分弱を占めていた。

住まいの内訳は、自宅515人、自宅外403人、不明3人であり、自宅と自宅外の比率は約1:0.8であり、現状をおおよそ反映した結果になっていた。

2.2 調査内容

質問紙の構成は、以下の通りである。

① フェースシート

性別、学年、年齢、学部、住まいを尋ねる5項目。

② 大学生生活の過ごし方

溝上（2009）が用いた大学生生活の過ごし方の尺度17項目。授業、授業外の学習、自主的学習、読書、マンガ・雑誌や新聞を読む、クラブ・サークル活動、アルバイト、同性や異性の友人との付き合い、テレビ、ゲーム、通学時間などについて、1週間に費やす時間数を（1）全然ない、（2）1時間未満、（3）1～2時間、（4）3～5時間、（5）6～10時間、（6）11～15時間、（7）16～20時間、（8）21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

③ 時間の使い方の満足度

Benesse 教育研究開発センター（2009）で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目。時間の使い方を100点満点で評定し、0点から100点までの10点刻みの11段階の中から選択する。

④ クリティカルシンキング志向性

廣岡ら (2000, 2001) が開発したクリティカルシンキング志向性尺度 social version と non social version の中から, 「他者に対する真正性」(「友だちに対してでも, 悪いことは悪いと指摘できる」 「間違った考え方をしている人には, それを指摘することができる」 など3項目), 「論理的な理解」(「人の話のポイントをつかむことができる」 「わかりやすく物事を伝えることができる」 など4項目), 「探求心」(「他の人があきらめても, なお答えを探し求め続ける」 「ふつうの人が気にもかけないようなことに疑問をもつ」 など4項目), 「証拠の重視」(「確たる証拠の有無にこだわる」 「根拠にもとづいた行動をとる」 など4項目), 「決断力」(「いったん決断したら最後までやり抜く」 「ここぞというところで決断できる」 など3項目) について, 「1. 全く当てはまらない」 から 「5. 非常に当てはまる」 までの5件法で回答を求めた。

⑤ コミュニケーション・スキル

藤本・大坊 (2007) のコミュニケーション・スキルの多因子構造を検討する ENDORE モデルの中から, 対人スキルを測定する「関係調整」(「人間関係を第一に考えて行動する」 「意見の対立による不和に適切に対処する」 など4項目) を用いて, 「1. 全く当てはまらない」 から 「5. 非常に当てはまる」 までの5件法で回答を求めた。

⑥ ハーディネス

森・東條・鈴木 (2005) が開発した大学生用ハーディネス尺度「チャレンジ」(「これからの展開がどうなるかわからない方が面白いと思う」 「先の見通しが立たなくてもなんとかなるさと思う」 など8項目), 「コントロール」(「思いがけないことが起こったときにも臨機応変に対応できる」 「問題があればそれを解決しようと努力できる」 など9項目), 「コミットメント」(「一生懸命やれば目標に到達できると思う」 「努力は必ず報われると思う」 など10項目) を用いて, 「1. 全くそうは思わない」 から 「5. とてもそう思う」 までの5件法で回答を求めた。

⑦ 自己効力感尺度

三好 (2003) が作成した人格特性自己効力感尺度 (MSGSE) 6項目 (「どんな状況に直面しても, 私ならうまくそれに対処することができる」 「私にとって, 最終的にはできないことが多いと思う」 など) に対して, 「1. 全く当てはまらない」 から 「5. 非常に当てはまる」 までの5件法で回答を求めた。

⑧ 他者との意見の相互調整

宗田・岡本 (2005) が作成したアイデンティティの発達をとらえる「関係性尺度」の中から, 「他者との意見の相互調整」(「私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする」 「自分と異なる意見を持つ人とは, あまり話したくない」 (逆転項目) など4項目) に対して, 「1. 全く当てはまらない」 から 「5. 非常に当てはまる」 までの5件法で回答を求めた。

⑨ 目標意識尺度

都筑（1999）が作成した目標意識尺度35項目6下位尺度の中から、3つの下位尺度（将来への希望，時間管理，計画性）の20項目に対して、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件法で回答を求めた。

2.3 調査期日

2012年7月

2.4 調査手続き

質問紙に回答するかどうかは自己決定できることを伝えた上で、授業時間内に質問紙を配布して調査を実施した。

[都筑 学]

3. 結果と考察

3.1 大学生生活の過ごし方

3.1.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

大学生生活の過ごし方17項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析をおこない、固有値1以上の5因子を抽出した。さらに因子負荷量.30以上の項目に対して因子分析をおこなったところ、表3-1-1に示されるような解釈可能な4因子が抽出された。

第1因子には、「勉強のための本（新書や専門書など）を読む」「授業とは関係のない勉強を自主的にする」「新聞を読む」の因子負荷が高かったので、「授業外の自主的勉強」因子と命名した。

第2因子には、「異性の友だちと交際する」「同性の友だちと交際する」「コンパや懇親会などに参加する」「クラブ・サークル活動・部活動をする」の因子負荷が高かったので、「対人交際」因子と命名した。

第3因子には、「マンガや雑誌を読む」「ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする」「インターネットサーフィンをする」「娯楽のための本（小説や一般書など）を読む」の因子負荷が高かったので、「インターネット・マンガ・ゲーム」因子と命名した。

第4因子には、「大学で授業や実験に参加する」「授業に関する勉強（予習や復習，課題など）をする」の因子負荷が高かったので、「大学の授業・勉強」因子と命名した。

このようにして得られた因子構造は、都筑ら (2012) における因子構造と全く同一であった。

表 3-1-1 大学生生活の過ごし方の因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
1. 勉強のための本 (新書や専門書など) を読む	.830	.007	-.058	.089
7. 授業とは関係のない勉強を自主的にする	.620	.024	.034	-.129
4. 新聞を読む	.392	-.023	.068	.036
3. 異性の友だちと交際する	.091	.645	-.120	-.038
13. 同性の友だちと交際する	-.032	.615	.076	.193
12. コンパや懇親会などに参加する	.032	.500	.030	-.157
6. クラブ・サークル活動・部活動をする	-.123	.342	.004	-.014
11. マンガや雑誌を読む	-.028	.132	.620	.005
8. ゲーム (ゲーム機・コンピュータゲームなど) をする	-.091	-.060	.590	-.081
15. 娯楽のための本 (小説や一般書など) を読む	.206	-.019	.468	-.007
2. インターネットサーフィンをする	.109	-.100	.403	.103
14. 大学で授業や実験に参加する	-.115	-.010	-.015	.819
10. 授業に関する勉強 (予習や復習, 課題など) をする	.198	-.067	-.002	.473
因子間相関	因子 1	-.056	.307	.252
	因子 2		.217	.275
	因子 3			.122

次に、大学生生活の過ごし方のタイプを明らかにするために、4つの下位尺度の合成得点のZスコアを用いて、ward法によるクラスタ分析をおこなった。3～6クラスタを検討したところ、6クラスタが最も適当であると考えられた。

図 3-1-1 には、大学生生活の過ごし方 4 下位尺度における各クラスタの得点 (Zスコア) を示した。

クラスタ 1 (158人) は、「授業外の自主的勉強」が少なく、「インターネット・マンガ・ゲーム」が多かった。「対人交際」「大学の授業・勉強」はほぼ平均だった。このクラスタはインターネット等のヴァーチャルな活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう。

クラスタ 2 (130人) は、「大学の授業・勉強」「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「対人交際」のいずれも少なかった。このクラスタは、授業や授業外の勉強を含めて、全体に活動が不活発な群であるといえるだろう。

クラスタ 3 (218人) は、「大学での授業・勉強」は多かったが、それ以外の「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」は少なかった。このクラスタは、大学の授業には熱心に参加するが、それ以外の活動には消極的な群であるといえるだろう。

クラスタ4（174人）は、「授業外の自主的勉強」が多かったが、「対人交際」と「大学の授業・勉強」が少なく、「インターネット・マンガ・ゲーム」は平均とほぼ同じだった。このクラスタは、大学の授業以外の勉強に取り組んでいる群だといえるだろう。

クラスタ5（81人）は、「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」「対人交際」のいずれ也多かった。このクラスタは、大学生活における活動に対して積極的に取り組んでいる群であるといえるだろう。

クラスタ6（80人）は、「対人交際」が多く、「授業以外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学での授業・勉強」はほぼ平均的だった。このクラスタは、6つのクラスタはクラスやサークルなどの対人関係的な活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう。

以上のような結果を総合的にふまえて、クラスタ1をヴァーチャル活動群、クラスタ2を低活動群、クラスタ3を授業出席勉強群、クラスタ4を自主勉強中心群、クラスタ5を高活動群、クラスタ6を対人活動中心群と名付けた。

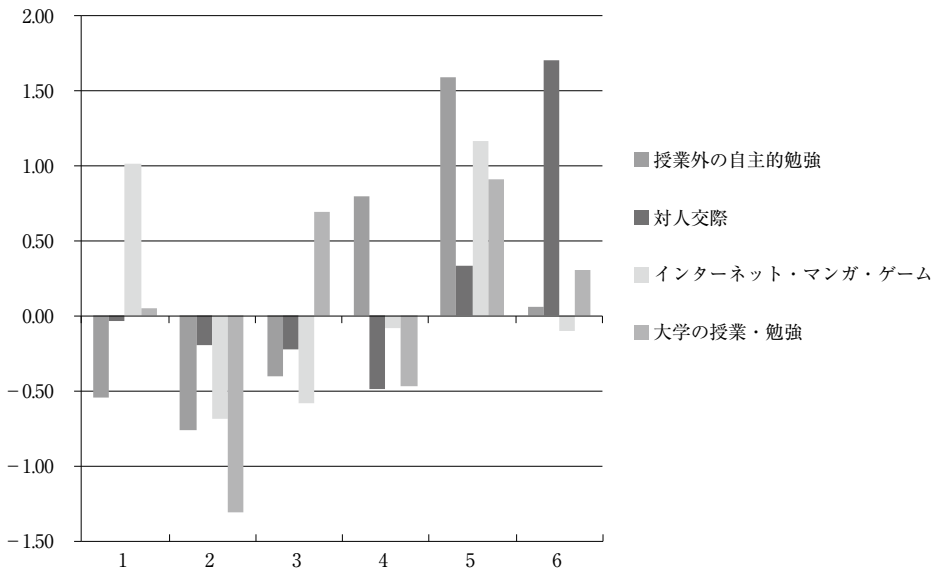


図 3-1-1 クラスタ分析による生活時間の過ごし方のタイプ（Zスコア）

〔都筑 学〕

3.1.2 大学生生活の過ごし方タイプとコミュニケーション能力との関連

以下の項においては、上記で得られた大学生生活の過ごし方の6つの異なるタイプに属する学生が、大学卒業後に必要とされる力をどの程度身につけているかを検討していく。その際、日頃の時間の使い方に関する満足度も考慮に入れることにして、10~30点を満足度低群(180人)、40~60点を満足度中群(516人)、70~100点を満足度高群(217人)に分類した。

大学生生活の過ごし方によってコミュニケーション能力が異なるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方のタイプ(6)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、コミュニケーション能力の「関係調整」と「他者との意見の相互調整」の得点を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-1-2には、関係調整についての結果を示した。「生活の過ごし方6タイプ」($F(5,816)=3.95, p<.01$)と「時間の使い方の満足度3群」($F(2,816)=7.42, p<.01$)の主効果が有意であった。交互作用は有意でなかった($F(10,816)=1.40, n.s.$)。

Bonferroniの法による多重比較の結果、対人活動群はヴァーチャル活動群、低活動群、高活動群よりも有意に得点が高く($p<.05$)、自主勉強群よりも有意に得点が高かった($p<.05$)。授業出席勉強群は、自主勉強群よりも有意に得点が高かった($p<.05$)。

時間の使い方の満足度低群は、中群よりも有意に得点が低く($p<.05$)、高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。

表3-1-2 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度における関係調整の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	3.47	0.84	3.23	0.97	3.68	0.82	3.17	0.98	3.67	0.73	3.64	0.38	3.47	0.86		
時間の使い方満足度中群(m)	3.69	0.70	3.74	0.82	3.84	0.61	3.49	0.76	3.48	0.69	3.97	0.54	3.71	0.71		
時間の使い方満足度高群(h)	3.77	0.79	3.67	0.68	3.75	0.67	3.79	0.71	3.69	0.82	4.15	0.52	3.79	0.71		
計	3.64	0.76	3.64	0.85	3.79	0.67	3.54	0.80	3.58	0.74	3.97	0.54	3.68	0.75	3.95**	a<f, b<f, d<c, d<f, e<f
時間の使い方の満足度の主効果															7.42**	l<m, l<h,

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-1-3は、他者との意見の相互調整についての結果を示した。ここでは「他者との意見の相互調整」に関して、生活の過ごし方タイプ($F(5,816)=0.91, n.s.$)と時間の使い方の満足度($F(2,816)=2.29, n.s.$)ともに主効果に有意差はみられなかった。交互作用も有意でなかつ

た ($F(10,816)=0.82, n.s.$).

表 3-1-3 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における他者との意見の相互調整の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	F 値	多重比較結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD			
時間の使い方満足度低群(l)	3.25	0.74	3.36	0.95	3.43	0.74	3.35	0.76	3.52	0.69	3.45	0.53	3.36	0.76			
時間の使い方満足度中群(m)	3.44	0.70	3.56	0.72	3.52	0.62	3.48	0.67	3.44	0.79	3.71	0.64	3.52	0.68			
時間の使い方満足度高群(h)	3.62	0.83	3.32	0.83	3.55	0.82	3.53	0.76	3.81	0.83	3.64	0.77	3.57	0.81			
計	3.41	0.74	3.48	0.79	3.51	0.70	3.48	0.71	3.58	0.80	3.66	0.66	3.50	0.73	0.91		
時間の使い方の満足度の主効果															2.29		

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

得られた結果から、人との交流時間が多い対人活動中心群がその他の群よりも、関係調整の能力に優れていることがわかった。

授業出席勉強群は、自主勉強中心群よりも関係調整が優れていたのは、自分一人で勉強している学生よりも、教室で他の仲間と共に勉強する方がコミュニケーションを取ることができるからであろう。コミュニケーション能力は、大学生活における学生のいろいろな活動が、どれくらい仲間と接しているかということに密接に関係しているということが明らかになった。

一方、時間の使い方に満足していればいるほど、コミュニケーション能力が高いということがわかった。

これらのことから、人との交流のある活動や計画的な時間の使い方といったものがコミュニケーション能力を高めるのに重要な要因となることが明らかになった。

[早川宏子・早川みどり]

3.1.3 大学生生活の過ごし方タイプとクリティカルシンキング志向性との関連

大学生生活の過ごし方によってクリティカルシンキングが異なるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方のタイプ(6)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数とし、クリティカルシンキング志向性の下位尺度の得点を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-1-4に他者に対する真正性に関する結果を示した。生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり($F(5,814)=3.51, p<.01$)、時間の使い方の満足度による主効果についても有意であった($F(2,814)=5.08, p<.01$)。交互作用は有意でなかった($F(10,814)=1.13, n.s.$)。

Bonferroni の法による多重比較の結果, 大学生生活の過ごし方タイプにおいて, ヴァーチャル活動群は高活動群と対人活動中心群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$). 時間の使い方の満足度において, 満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く, 満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

表 3-1-4 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における他者に対する真正性の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	3.06	0.95	2.97	0.95	3.21	1.00	3.60	0.73	3.75	0.51	3.52	0.54	3.25	0.91		
時間の使い方満足度中群(m)	3.34	0.85	3.47	0.99	3.45	0.80	3.34	0.84	3.63	0.87	3.65	0.81	3.45	0.86		
時間の使い方満足度高群(h)	3.56	0.88	3.46	0.91	3.62	0.88	3.57	0.86	3.74	0.88	4.03	0.60	3.64	0.86		
計	3.29	0.89	3.38	0.98	3.45	0.87	3.44	0.84	3.68	0.82	3.73	0.75	3.45	0.88	3.51**	a<e, a<f
時間の使い方の満足度の主効果															5.08**	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった. 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した.

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-1-5 に論理的な理解に関する結果を示した. 生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり ($F(5,811)=3.04$, $p<.01$), 時間の使い方の満足度による主効果についても有意であった ($F(2,811)=12.07$, $p<.001$). 交互作用は有意でなかった ($F(10,811)=0.99$, $n.s.$). Bonferroni の法による多重比較の結果, 大学生生活の過ごし方タイプにおいて, どの群間にも有意な差はみられなかった. 時間の使い方の満足度において, 満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く, 満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

表 3-1-5 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における論理的な理解の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	3.19	0.74	3.11	0.82	3.26	0.88	3.36	0.77	3.56	0.52	3.45	0.65	3.27	0.78		
時間の使い方満足度中群(m)	3.46	0.67	3.52	0.75	3.44	0.65	3.47	0.64	3.57	0.67	3.67	0.54	3.50	0.66		
時間の使い方満足度高群(h)	3.82	0.68	3.35	0.89	3.59	0.63	3.80	0.63	3.90	0.64	3.88	0.65	3.72	0.69		
計	3.44	0.72	3.41	0.80	3.44	0.70	3.55	0.67	3.68	0.65	3.70	0.59	3.51	0.71	3.04***	l<m<h
時間の使い方の満足度の主効果															12.07***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった. 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した.

3) 多重比較の結果では有意な差は見られなかった.

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-1-6 に探究心に関する結果を示した. 生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であ

り ($F(5,811)=4.04, p<.01$), 時間の使い方の満足度による主効果についても有意であった ($F(2,811)=3.51, p<.05$). 交互作用は有意でなかった ($F(10,811)=0.74, n.s.$). Bonferroni の法による多重比較の結果, 大学生生活の過ごし方タイプにおいて, ヴァーチャル活動群は高活動群と対人活動中心群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$). 時間の使い方満足度において, 満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

表 3-1-6 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における探究心の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	3.31	0.72	3.42	0.83	3.42	0.63	3.59	0.69	4.00	0.54	3.64	0.36	3.47	0.69		
時間の使い方満足度中群(m)	3.56	0.68	3.71	0.70	3.68	0.55	3.62	0.64	3.77	0.57	3.84	0.47	3.68	0.62		
時間の使い方満足度高群(h)	3.64	0.69	3.66	0.74	3.74	0.60	3.73	0.64	4.00	0.55	3.81	0.68	3.76	0.64		
計	3.50	0.70	3.65	0.73	3.65	0.59	3.65	0.65	3.88	0.56	3.80	0.52	3.66	0.64	4.04**	a<e, a<f
時間の使い方の満足度の主効果															3.51**	l<m, l<h

1) 交互作用は有意ではなかった. 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した.
** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-1-7 に証拠の重視に関する結果を示した. 生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり ($F(5,812)=3.74, p<.01$), 時間の使い方の満足度による主効果についても有意であった ($F(2,812)=12.23, p<.001$). 交互作用は有意でなかった ($F(10,812)=1.21, n.s.$). Bonferroni の法による多重比較の結果, 大学生生活の過ごし方タイプにおいて, 低活動群は自主勉強中心群と高活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$). 時間の使い方の満足度において, 満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く, 満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

表 3-1-7 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における証拠の重視の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	3.21	0.85	2.80	0.79	3.16	0.84	3.33	0.76	3.35	0.77	3.11	0.88	3.16	0.82		
時間の使い方満足度中群(m)	3.25	0.74	3.35	0.81	3.34	0.70	3.44	0.66	3.47	0.74	3.40	0.58	3.36	0.71		
時間の使い方満足度高群(h)	3.62	0.68	3.28	0.78	3.36	0.80	3.75	0.60	3.80	0.76	3.74	0.67	3.58	0.74		
計	3.30	0.77	3.24	0.82	3.31	0.75	3.51	0.67	3.56	0.76	3.45	0.67	3.38	0.75	3.74**	b<d, b<e
時間の使い方の満足度の主効果															12.23**	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった. 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した.
** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-1-8 に決断力に関する結果を示した。生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり ($F(5,813)=2.15, p<.001$), 時間の使い方の満足度による主効果についても有意であった ($F(2,813)=10.44, p<.001$)。交互作用は有意でなかった ($F(10,813)=1.12, n.s.$)。Bonferroni の法による多重比較の結果, 大学生生活の過ごし方タイプにおいて, ヴァーチャル活動群はそれ以外のタイプ (低活動群, 授業出席勉強群, 自主勉強中心群, 高活動群, 対人活動中心群) よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。時間の使い方の満足度において, 満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く, 満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。

表 3-1-8 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における決断力の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	2.81	0.82	2.90	0.75	2.96	0.73	3.17	0.65	3.29	0.65	3.14	0.47	3.98	0.74		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.06	0.64	3.36	0.78	3.44	0.59	3.36	0.68	3.58	0.81	3.52	0.74	3.37	0.70		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.38	0.69	3.67	0.78	3.50	0.67	3.79	0.59	3.50	0.73	3.69	0.73	3.60	0.69		
計	3.04	0.73	3.34	0.80	3.36	0.67	3.46	0.68	3.51	0.76	3.51	0.72	3.35	0.73	2.15***	a<b, a<c, a<d, a<e, a<f
時間の使い方の 満足度の主効果															10.44***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

これらの結果から, 5つの下位尺度に共通して, 自分の時間の使い方に満足していると考えている学生はそうでない学生よりもクリティカルシンキング志向性が高いということが明らかになった。廣岡ら (2001) はクリティカルシンキングを育てることの必要性を述べているが, 本研究の結果から大学生生活においては, まず自身の時間の使い方に満足できるようになることが, クリティカルシンキング能力を高めていく上で必要になると思われる。

またクリティカルシンキングと大学生生活の過ごし方の関連については, 他者に対する真正性と探究心において, ヴァーチャル活動群が高活動群や対人関係中心群よりも低く, 決断力においては, ヴァーチャル活動群はその他の活動タイプよりも低いという結果が得られた。一方, 証拠の重視においては, 低活動群が自主勉強中心群や高活動群よりも低いという結果が得られた。

以上の結果を踏まえると, クリティカルシンキング志向性の育成にとっては好ましくない大学生生活の過ごし方が存在することが指摘できる。ヴァーチャル活動群の特徴としてインターネットやマンガ, 娯楽のための本を読むといった活動に多くの時間を割いていることがあげられるが, これらの活動を中心におこなうことはクリティカルシンキング志向性にとって好ま

しくない態度であるということが窺える。ただし、このようなインターネットやマンガ等の娯楽に時間を費やしているとしても、高活動群のようにその他の活動もおこなうことがクリティカルシンキング志向性を高めることに繋がることも同時に指摘できる。また証拠を重視するという態度については低活動群において低く、高活動群において高いという結果が得られていることから、さまざまな活動に積極的に取り組むことの重要性が指摘できる。このようにして活動に取り組むことによって、吉田（2002）が述べているように、廣岡ら（2000）の提唱した「適切な基準や根拠に基づく論理的で、偏りのない思考」が養われていくのであろう。

〔永井暁行〕

3.1.4 大学生生活の過ごし方タイプとハーディネスとの関連

大学生生活の過ごし方によってハーディネスが異なるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方（6）と時間の使い方の満足度（3）を独立変数とし、ハーディネスの3つの下位尺度の得点を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-1-9は、大学生の過ごし方6タイプにおけるチャレンジに関する得点を、時間の使い方の満足度別に示したものである。大学生生活の過ごし方の主効果は有意でなかった（ $F(5,810)=1.45, n.s.$ ）。時間の使い方の満足度の主効果は有意だった（ $F(2,810)=4.33, p<.05$ ）。大学生生活の過ごし方×時間の使い方の満足度の交互作用は有意ではなかった（ $F(10,810)=0.49, n.s.$ ）。

時間の使い方の満足度の主効果が有意であったので、Bonferroniの法による多重比較をおこなった。その結果、時間の使い方の満足度低群よりも、満足度中群の方が高かった（ $p<.05$ ）。満足度低群よりも、満足度高群の方が高かった（ $p<.05$ ）。時間の使い方に満足している群ほど、チャレンジの得点が高いことが明らかとなった。

表3-1-9 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度におけるチャレンジの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		F値	多重比較結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
時間の使い方満足度低群(l)	3.02	0.83	3.27	0.96	3.00	0.97	3.05	1.18	3.51	0.57	3.30	0.68	3.11	0.92		
時間の使い方満足度中群(m)	3.41	0.76	3.41	0.94	3.35	0.77	3.37	0.86	3.35	0.80	3.49	0.81	3.39	0.82		
時間の使い方満足度高群(h)	3.48	0.97	3.45	0.88	3.33	0.79	3.43	0.84	3.66	0.80	3.55	0.75	3.45	0.83		
計	3.30	0.83	3.39	0.93	3.27	0.82	3.34	0.91	3.48	0.77	3.48	0.77	3.35	0.85	1.45	
時間の使い方の満足度の主効果															4.33*	l<m, l<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-1-10は、大学生の過ごし方6タイプにおけるコントロールに関する得点を、時間の使い方の満足度別に示したものである。

コントロールについては、大学生生活の過ごし方の主効果は有意であった ($F(5,806)=4.93, p<.001$)。時間の使い方の満足度の主効果は有意であった ($F(2,806)=34.62, p<.001$)。大学生生活の過ごし方×時間の使い方の満足度の交互作用は有意ではなかった ($F(10,806)=1.12, n.s.$)。

大学生生活の過ごし方の主効果が有意であったので、Bonferroniの法による多重比較をおこなった。その結果、ヴァーチャル活動群よりも授業出席勉強群・自主勉強中心群・高活動群・対人活動中心群の方が高かった ($p<.05$)。対人活動中心群は低活動群よりもコントロールの得点が高かった ($p<.05$)。

時間の使い方の満足度の主効果が有意であったので、Bonferroniの法による多重比較をおこなった。その結果、時間の使い方の満足度低群よりも、中群・高群の方がコントロールの得点が高く ($p<.05$)、満足度中群よりも、満足度高群の方が高かった ($p<.05$)。

表3-1-10 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度におけるコントロールの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	2.71	0.66	2.79	0.60	2.93	0.69	2.81	0.69	2.94	0.53	3.46	0.73	2.86	0.68		
時間の使い方満足度中群(m)	3.07	0.62	3.27	0.68	3.24	0.58	3.26	0.62	3.40	0.57	3.31	0.49	3.24	0.61		
時間の使い方満足度高群(h)	3.41	0.70	3.41	0.70	3.45	0.60	3.62	0.62	3.61	0.72	3.83	0.39	3.55	0.63		
計	3.01	0.68	3.21	0.70	3.24	0.62	3.30	0.67	3.40	0.65	3.47	0.55	3.24	0.66	4.93***	a<c, a<d, a<e, a<f, b<f
時間の使い方の満足度の主効果															34.62***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-1-11は、大学生の過ごし方6タイプにおけるコミットメントに関する得点を、時間の使い方の満足度別に示したものである。

コミットメントについては、大学生生活の過ごし方の主効果は有意であった ($F(5,805)=5.32, p<.001$)。時間の使い方の満足度の主効果は有意であった ($F(2,805)=33.93, p<.001$)。交互作用は有意ではなかった ($F(10,805)=1.19, n.s.$)。

大学生生活の過ごし方の主効果が有意であったので、Bonferroniの法による多重比較をおこなった。その結果、ヴァーチャル活動群よりも低活動群・授業出席勉強群・自主勉強中心群・高活動群・対人活動中心群の方がコミットメントの得点が高かった ($p<.05$)。自主勉強中心群

よりも対人活動中心群の得点が高かった ($p<.05$).

時間の使い方の満足度の主効果が有意であったので、Bonferroni の法による多重比較をおこなった。その結果、時間の使い方の満足度低群よりも、中群・高群の方が高く ($p<.05$), 満足度中群よりも、高群の方が高かった ($p<.05$).

表 3-1-11 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度におけるコミットメントの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.01	0.61	2.96	0.57	3.08	0.51	2.96	0.55	2.99	0.63	3.45	0.57	3.04	0.57		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.15	0.50	3.37	0.59	3.41	0.47	3.33	0.51	3.42	0.60	3.44	0.48	3.34	0.53		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.36	0.54	3.70	0.49	3.60	0.53	3.57	0.59	3.50	0.66	3.94	0.56	3.59	0.58		
計	3.14	0.55	3.35	0.61	3.39	0.52	3.34	0.57	3.39	0.64	3.56	0.55	3.34	0.58	5.32***	a<b, a<c, a<d, a<e, a<f, d<f
時間の使い方の 満足度の主効果															33.93***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

大学生生活の過ごし方の 6 タイプの主効果がみられたのは、コントロールとコミットメントにおいてであった。大学生生活の過ごし方の 6 タイプの中で比較した時に、ヴァーチャル活動群の得点の低さが顕著であった。大学生生活の過ごし方の 6 タイプの中で比較した際に、全体的に活動量が低いと考えられる低活動群よりもヴァーチャル活動群の方が、他の群よりもコントロールとコミットメントの得点が低かった。

コントロールやコミットメントに含まれるのは、問題を自分で解決しようとする主体性や自分が実行した結果は自身で統制できるという能動性であり、大学生生活だけでなく就職活動や卒業後の進路でも求められるものである。ヴァーチャル活動群はこのコントロールやコミットメントに弱さをかかえており、受け身の姿勢が強く、自分の力で物事を決めていくことに自信のなさや諦めを感じている群だといえるだろう。ヴァーチャル活動群の学生が大学生生活の中で不適応状態に陥っていないか、進路選択に向けて動き出せているか等の配慮が必要だと考えられる。

インターネット・マンガ・ゲームの時間数で見れば、ヴァーチャル活動群(10.3時間)と同水準で高活動群(10.2時間)も高い。しかし、ヴァーチャル活動群は、インターネット・マンガ・ゲームの時間だけが長い群である。大学生は何かを調べたり、就職活動をしたりする際には、インターネットが欠かす事の出来ない状況に置かれている。インターネット・マンガ・ゲームに時間を費やすことが悪いのではなく、それをどのように使っているのか、インターネット・

マンガ・ゲームへの時間の使い方の質が問われる。

次に、時間の使い方の満足度の主効果がみられたのは、チャレンジ、コントロール、コミットメントにおいてであった。時間の使い方の満足度が低ければ、ハーディネスに関する得点は低く、時間の使い方の満足度が高ければハーディネスに関する得点は高いという結果になっていた。充実した大学生活を送り、自分なりに大学生活の過ごし方に満足している大学生ほど、ハーディネスが高まっていくと推測される。しかし、この因果関係を想定するには注意を要する。ライフイベントを経験し、それを克服することがハーディネスを高める (城, 2010)。学生が、大学入学前の段階においてライフイベントを経験し、それを克服しながら達成感や成功体験を積み重ねてきたとも推測される。その結果、ハーディネスが高まり、ストレスフルな状況下であっても充実した大学生活を過ごせていることで、大学生は時間の使い方に満足しているからとも考えられるからである。現在の時間の使い方に対する満足度だけでなく、小学校、中学校、高校などの時間の使い方にもどの程度満足しているのか、過去の時間の使い方を指標として取り入れて分析することも今後の課題であろう。

[金子泰之]

3.1.5 大学生生活の過ごし方タイプと時間的能力との関連

大学生生活の過ごし方によって時間的能力が異なるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方タイプ (6) と時間の使い方の満足度 (3) を独立変数、計画性と時間管理を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-1-12には、計画性に関する結果を示した。計画性に関して、大学生生活の過ごし方の主効果が有意だった ($F(5,809)=2.55, p<.05$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、高活動群や自主勉強中心群、授業出席勉強群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

時間の使い方の満足度の主効果も有意だった ($F(2,809)=22.12, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、時間の使い方の満足度高群は満足度中群・低群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。時間の使い方の満足度中群は満足度低群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。交互作用は有意でなかった ($F(10,809)=0.51, n.s.$)。

表3-1-12 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度における計画性の得点
およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(i)	2.28	0.72	2.42	0.71	2.37	0.75	2.58	0.80	2.22	0.71	2.25	0.70	2.36	0.73		
時間の使い方満足度中群(m)	2.50	0.68	2.78	0.70	2.81	0.83	2.88	0.80	2.83	0.83	2.66	0.77	2.75	0.78		
時間の使い方満足度高群(h)	2.74	0.74	2.85	0.79	2.97	0.90	3.09	0.75	3.24	1.04	2.98	1.08	3.00	0.88		
計	2.47	0.71	2.72	0.73	2.76	0.85	2.90	0.80	2.88	0.94	2.69	0.87	2.73	0.82	2.55*	a<c, a<d, a<e
時間の使い方の満足度の主効果															22.15***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-1-13は、時間管理に関する結果を示した。有意な交互作用がみられた ($F(10,806)=2.09, p<.05$)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定をおこなった。

ヴァーチャル活動群における時間の使い方の満足度の単純主効果が有意であり ($F(2,806)=5.35, p<.01$)、時間の使い方の満足高群は中群・低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。低活動群における時間の使い方の満足度の単純主効果 ($F(2,806)=8.51, p<.001$) が有意であり、時間の使い方の満足高群は中群・低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。授業出席勉強群における時間の使い方の満足度の単純主効果 ($F(2,806)=16.91, p<.001$) が有意であり、時間の使い方の満足度高群・中群は低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。自主勉強中心群における時間の使い方の満足度の単純主効果 ($F(2,806)=16.54, p<.001$) が有意であり、時間の使い方の満足度の高群は低群・中群よりも得点が高かった ($p<.05$)。時間の使い方の満足度中群は低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。高活動群における時間の使い方の満足度の単純主効果 ($F(2,806)=4.61, p<.05$) が有意であり、時間の使い方の満足度の高群・中群は低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。対人活動中心群における時間の使い方の満足度の単純主効果 ($F(2,806)=11.73, p<.001$) が有意であり、時間の使い方の満足度高群は中群・低群よりも得点が高かった ($p<.05$)。

また、時間の使い方の満足度中群における大学生生活の過ごし方タイプの単純主効果 ($F(5,806)=4.80, p<.001$) が有意であり、授業出席勉強群・自主勉強中心群・高活動群はヴァーチャル活動群よりも得点が高かった ($p<.05$)。

表 3-1-13 大学生生活の過ごし方 6 タイプと時間の使い方の満足度における時間管理の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		時間の使い方満足度における大学生生活の過ごし方6タイプの単純主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	2.23	0.77	2.63	0.80	2.20	0.85	2.19	0.74	2.23	0.80	2.22	0.69	2.27	0.79		
時間の使い方満足度中群(m)	2.35	0.63	2.60	0.83	2.84	0.77	2.77	0.79	2.86	0.61	2.62	0.76	2.68	0.77	4.80*	a<c, d, e
時間の使い方満足度高群(h)	2.86	0.91	3.36	0.78	3.13	0.83	3.28	0.82	3.06	1.03	3.47	0.92	3.19	0.88		
計	2.39	0.75	2.74	0.86	2.79	0.86	2.83	0.86	2.83	0.84	2.79	0.90	2.72	0.85		
大学生生活の過ごし方6タイプにおける時間の使い方の満足度の単純主効果(数値はF値)	5.35**		8.51***		16.91***		16.54***		4.61*		11.73***					
	l, m<h		l, m<h		l<m, h		l<m<h		l<m, h		l, m<h					

1) 交互作用が有意だった ($F(10,806) = 2.09, p < .05$) ため単純主効果の検定を行った。

** $p < .001$, * $p < .01$, * $p < .05$

これらの結果から、計画性については、時間の使い方の満足度が高い大学生は、計画性をもっているということがわかった。授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群に属する大学生は、ヴァーチャル活動群の大学生より、計画を立てる能力が高いということがわかった。時間管理については、時間満足度が高い大学生は、時間管理できるということがわかった。時間の使い方の満足度が中程度の大学生は、ヴァーチャル活動群より、授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群に属する大学生の時間管理能力が高いということがわかった。

以上の結果をまとめると、時間の使い方に満足している大学生は大学生生活の中で、計画性と時間管理能力が高いということがわかった。ヴァーチャル活動群に属する大学生はほかの活動群に属する大学生より、計画性・時間管理能力が低いと考えられる。

[梁 晋衡]

3.1.6 大学生生活の過ごし方タイプと自信との関連

大学生生活の過ごし方によって現在や将来の自分への自信が異なるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方タイプ(6)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数とし、自己効力感または将来への展望を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表 3-1-14に自己効力感に関する結果を示した。大学生生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり ($F(5,810) = 2.58, p < .05$)、時間の使い方の満足度による主効果も有意であった ($F(2,810) = 23.24, p < .001$)。交互作用は有意でなかった ($F(10,810) = 0.81, n.s.$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、大学生生活の過ごし方タイプにおいて、ヴァーチャル活動群は、低活動群および対人活動中心群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。時間の使い方の満足度におい

ては、満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く ($p<.05$)、満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。

表3-1-14 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度における自己効力感の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	2.67	0.73	2.89	0.74	2.57	0.73	2.74	1.00	2.76	0.65	3.02	0.64	2.72	0.77		
時間の使い方満足度中群(m)	2.84	0.67	3.12	0.72	3.06	0.69	2.96	0.80	3.04	0.83	3.19	0.57	3.02	0.72		
時間の使い方満足度高群(h)	3.22	0.92	3.33	0.77	3.34	0.73	3.45	0.83	3.14	0.91	3.73	0.75	3.37	0.82		
計	2.84	0.75	3.11	0.74	3.04	0.75	3.07	0.88	3.03	0.84	3.30	0.68	3.04	0.78	2.58*	a<b, a<f
時間の使い方の満足度の主効果															23.24***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-1-15に、将来への希望に関する結果を示した。大学生生活の過ごし方タイプによる主効果が有意であり ($F(5,815)=2.97$, $p<.05$)、時間の使い方の満足度による主効果も有意であった ($F(2,815)=18.03$, $p<.001$)。有意な交互作用は得られなかった ($F(10,815)=1.07$, $n.s.$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、大学生生活の過ごし方タイプにおいて、ヴァーチャル活動群は、高活動群および対人活動中心群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。時間の使い方の満足度においては、満足度低群は満足度中群よりも有意に得点が低く ($p<.05$)、満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。

表3-1-15 大学生生活の過ごし方6タイプと時間の使い方の満足度における将来への希望の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	ヴァーチャル活動群(a)		低活動群(b)		授業出席勉強群(c)		自主勉強中心群(d)		高活動群(e)		対人活動中心群(f)		計		大学生生活の過ごし方6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方満足度低群(l)	2.46	0.80	2.74	0.78	2.44	0.75	2.59	1.06	2.80	0.61	3.20	0.64	2.59	0.82		
時間の使い方満足度中群(m)	2.75	0.62	2.95	0.74	2.96	0.64	2.88	0.82	3.04	0.85	3.03	0.59	2.92	0.71		
時間の使い方満足度高群(h)	3.09	0.82	3.20	0.58	3.32	0.80	3.25	0.79	3.07	0.83	3.43	0.77	3.24	0.78		
計	2.71	0.74	2.96	0.73	2.94	0.76	2.95	0.87	3.02	0.81	3.16	0.66	2.93	0.78	2.97*	a<e, a<f
時間の使い方の満足度の主効果															18.03***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

これらの結果から、次のようなことが考えられる。自己効力感に関しては、ヴァーチャル活動群が低得点となった。特に有意差のみられた低活動群、および対人活動中心群の両群と比較すると、ヴァーチャル活動群では、「ネット・マンガ・ゲーム」に費やす時間が10.3時間と多いことが特徴であり、これらの活動が自己効力感に負の影響を与えていることが示唆された(低活動群2.1時間, 対人活動中心群5.9時間)。

また、将来への希望においてもヴァーチャル活動群は高活動群、および対人活動中心群よりも有意に得点が低く、「自主的勉強」が少ないこと、あるいは「ネット・マンガ・ゲーム」に費やす時間が多いことが、将来への希望に負の影響を与えていることが示唆された。

なお、時間の使い方の満足度に関しては、これが高くなれば自己効力感、将来への希望ともに有意に高まり、現在の時間の使い方の満足度は、現在の自己効力感、および将来への希望に大きく影響していることが明らかとなった。

[宮崎伸一]

3.2 部活動等の所属

3.2.1 部活動等の所属とコミュニケーション能力との関連

部活動等の経験がコミュニケーション能力にどのように影響するかを検討するために、部活動等の所属(3)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、コミュニケーション能力の「関係調整」と「他者との意見の相互調整」の得点を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-2-1は、部活動等の所属と時間の使い方の満足度における関係調整の結果を示したものである。「部活動等の所属」($F(2,900)=7.44, p<.001$), 「時間の使い方の満足度」($F(2,900)=3.82, p<.05$)ともに有意な主効果がみられた。交互作用は有意でなかった($F(4,900)=1.39, n.s.$)。

Bonferroniの法による多重比較の結果、サークルに所属している学生は、何も所属していない学生よりも有意に得点が高かった($p<.05$)。

さらに、時間満足低群は、中群、高群よりも有意に得点が低く($p<.05$)、中群は低群よりも有意に得点が高く($p<.05$)、高群は低群よりも有意に得点が高かった($p<.05$)。

表3-2-1 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における関係調整の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		大学生生活の過ごし方 6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.65	0.62	3.53	0.76	3.24	1.09	3.47	0.85		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.80	0.59	3.75	0.66	3.56	0.88	3.72	0.71		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.55	0.71	3.89	0.64	3.63	0.83	3.79	0.71		
計	3.70	0.64	3.74	0.68	3.51	0.92	3.69	0.75	7.44***	c<b
時間の使い方の 満足度の主効果									3.82*	l<m, l<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-2は、部活動等の所属における「他者との意見の相互調整」の結果を時間の使い方の満足度ごとに示したものである。「他者との意見の相互調整」に関して、「部活動等の所属」の主効果は有意であった ($F(2,900)=7.82, p<.001$)。交互作用は有意でなかった ($F(4,900)=2.29, n.s.$)。

Bonferroniの法による多重比較の結果、体育連盟の学生は、所属のない学生よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。サークルの学生は、所属のない学生よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。時間の使い方の満足群の主効果は有意でなかった ($F(2,900)=1.45, n.s.$)。

表3-2-2 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における他者との意見の相互調整の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		大学生生活の過ごし方 6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.71	0.78	3.44	0.72	3.01	0.79	3.36	0.77		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.59	0.64	3.54	0.66	3.44	0.76	3.53	0.68		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.48	0.92	3.62	0.72	3.45	0.90	3.56	0.79		
計	3.58	0.76	3.54	0.69	3.35	0.82	3.50	0.73	7.82***	c<a, c<b
時間の使い方の 満足度の主効果									1.45	

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

これらの結果から、次のようなことが明らかになった。まず、何にも所属していない学生は、「関係調整」・「他者との意見の相互調整」能力が低かった。「関係調整」能力は、サークルに属している学生が高く、「他者との意見の相互調整」能力は体育連盟の学生が高かった。このことから、何かのクラブに属して活動しているということがコミュニケーション能力の得点に大きく影響していることがわかる。さらに、時間の使い方の満足度との関連をみても、時間

の使い方に満足している学生は「関係調整」能力の得点が高い。「他者との意見の相互調整」は結果が得られなかった。

以上のように、コミュニケーション能力はクラブ活動や時間の使い方に大きく関係し、積極的にクラブ活動をすること、大学生生活を計画的に過ごすことがコミュニケーション能力を高めるのに重要な要因となることが明らかになった。

[村井 剛]

3.2.2 部活動等の所属とクリティカルシンキング志向性との関連

部活動等の経験がクリティカルシンキングにどのような影響を与えるのかを検討するために、部活動等の所属(3)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、クリティカルシンキング志向性の下位尺度を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-2-3に、他者に対する真正性に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果($F(2,898)=0.74, n.s.$)は有意でなかったが、時間の使い方の満足度による主効果に有意差がみられた($F(2,898)=6.91, p<.01$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。交互作用は有意でなかった($F(4,898)=0.75, n.s.$)

表3-2-3 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における他者に対する真正性の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		大学生生活の過ごし方 6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.37	0.87	3.28	0.84	3.03	1.18	3.22	0.94		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.55	0.98	3.44	0.83	3.41	0.90	3.45	0.86		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.64	0.81	3.61	0.84	3.70	0.91	3.63	0.85		
計	3.55	0.90	3.45	0.84	3.40	0.99	3.45	0.88	0.74	
時間の使い方の 満足度の主効果									6.91**	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-4に、論理的な理解に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果($F(2,894)=1.74, n.s.$)に有意差は認められなかったが、時間の使い方の満足度による主効果に有意差がみられた($F(2,894)=9.24, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。交互作用は有意ではなかった($F(4,894)=0.58, n.s.$)。

表3-2-4 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における論理的な理解の得点
およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		大学生生活の過ごし方 6タイプの主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.28	0.57	3.25	0.73	3.32	0.89	3.27	0.75		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.41	0.83	3.50	0.63	3.53	0.67	3.50	0.66		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.46	0.82	3.72	0.68	3.82	0.60	3.71	0.69		
計	3.40	0.78	3.50	0.68	3.55	0.72	3.50	0.70	1.74	
時間の使い方の 満足度の主効果									9.23***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-5には、探究心に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果 ($F(2,893)=3.30, p<.05$) と時間の使い方の満足度の主効果 ($F(2,893)=4.82, p<.01$) が有意だった。Bonferroniの法による多重比較の結果、体育連盟群は所属なし群よりも、有意に探究心の得点が高かった ($p<.05$)。

交互作用 ($F(4,893)=2.43, p<.05$) も有意であったため、単純主効果の検定をおこなったところ、サークル群においては、時間満足度低群は高群よりも得点が低く ($p<.05$)、所属なしの群においては、低群は中群・高群よりも得点が低かった ($p<.05$)。また、時間の使い方満足度低群において、体育連盟群は所属なし群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

表3-2-5 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における探究心の得点および単純主効果の結果¹⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		時間の使い方満足度における大学生 生活の過ごし方6タイプの単純主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.85	0.47	3.51	0.62	3.24	0.88	3.48	0.70	6.05**	c<a
時間の使い方 満足度中群(m)	3.72	0.71	3.66	0.60	3.65	0.67	3.67	0.63		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.82	0.78	3.73	0.63	3.83	0.58	3.77	0.64		
計	3.77	0.69	3.65	0.61	3.61	0.73	3.65	0.65		
所属における時 間の使い方の満 足度の単純主効 果(数値はF値)			4.07*		10.31***					
			l<h		l<m, l<h					

1) 交互作用が有意だった ($F(4,893)=2.43, p<.05$) ため単純主効果の検定を行った。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-6に、証拠の重視に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果 ($F(2,895)=2.49, n.s.$) は有意でなかったが、時間の使い方の満足度による主効果に有意差がみられた ($F(2,895)=10.90, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、満足度低群は満足度中群と

満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$). 交互作用は有意ではなかった ($F(4,895)=0.77, n.s.$).

表 3-2-6 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における証拠の重視の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		大学生生活の過ごし方 6 タイプの主効果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果	
時間の使い方 満足度低群(l)	3.04	0.64	3.22	0.73	3.14	1.06	3.18	0.82			
時間の使い方 満足度中群(m)	3.22	0.76	3.34	0.68	3.44	0.76	3.35	0.71			
時間の使い方 満足度高群(h)	3.41	0.86	3.54	0.73	3.77	0.62	3.57	0.73			
計	3.25	0.77	3.36	0.71	3.46	0.83	3.37	0.75	2.49		
時間の使い方の 満足度の主効果										10.90***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-2-7 に決断力に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果 ($F(2,896)=4.71, p<.01$) と時間の使い方の満足度の主効果 ($F(2,896)=24.20, p<.001$) が有意だった。Bonferroni の法による多重比較の結果、体育連盟群は所属なし群よりも有意に得点が高く ($p<.05$), サークル群は所属なし群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

交互作用 ($F(4,896)=3.15, p<.05$) も有意であったため、単純主効果の検定をおこなったところ、サークル群、所属なし群それぞれにおいて、低群は中群・高群よりも得点が低く ($p<.05$), 中群は高群よりも得点が低かった ($p<.05$). また、時間の使い方の満足度低群において、所属なし群は他の群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

表 3-2-7 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における決断力の得点および単純主効果の結果¹⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		時間の使い方満足度における大学生 生活の過ごし方 6 タイプの単純主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.34	0.57	3.05	0.65	2.64	0.92	2.97	0.75	7.75***	c<a, c<b
時間の使い方 満足度中群(m)	3.46	0.64	3.34	0.69	3.37	0.77	3.36	0.70		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.76	0.77	3.57	0.68	3.65	0.65	3.61	0.69		
計	3.53	0.69	3.34	0.70	3.28	0.85	3.34	0.74		
所属における時 間の使い方の満 足度の単純主効 果(数値はF値)			17.03***		25.87***					
			l<m<h		l<m, l<h					

1) 交互作用が有意だった ($F(4,896)=3.15, p<.05$) ため単純主効果の検定を行った。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

以上のように、時間の使い方の満足度低群において、体育連盟に所属する学生は所属なし群

よりも探求心や決断力が高いということがわかった。このような意識は、日々の部活動の中で養われていくものであるといえるだろう。

時間の使い方満足度のレベルが高くなるにつれ、クリティカルシンキングにおける各下位尺度の数値は高くなっていくことが明らかとなった。批判的思考をしっかりと持つことは、客観的なおかつ分析的に理解することに繋がり、そこから派生する行動にも影響を与え、そのことによって時間の使い方満足度の高低に同調していくのだと考えられる。

[村井 剛]

3.2.3 部活動等の所属とハーディネスとの関連

部活動等の経験がハーディネスにどのような影響を与えるかを検討するため、部活動等の所属(3)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、ハーディネスの3つの下位尺度を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-2-8にチャレンジに関する結果を示した。時間の使い方の満足度の主効果($F(2,892)=2.42, n.s.$)は有意でなかったが、部活動等の所属による主効果($F(2,892)=6.51, p<.01$)に有意差がみられた。Bonferroniの法による多重比較の結果、体育連盟群はサークル群と所属なし群よりも有意に得点が高かった($p<.05$)。交互作用は有意でなかった($F(4,892)=0.97, n.s.$)。

表3-2-8 部活動等の所属と時間の使い方の満足度におけるチャレンジの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		所属3群 の主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	3.65	0.68	3.13	0.85	2.93	1.10	3.13	0.92		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.56	0.73	3.37	0.81	3.35	0.87	3.38	0.81		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.61	0.83	3.46	0.80	3.31	0.89	3.44	0.83		
計	3.59	0.75	3.34	0.82	3.25	0.94	3.35	0.84	6.51**	b<a, c<a
時間の使い方の 満足度の主効果									2.42	

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-9にはコントロールに関する結果を示した。部活動等の所属の主効果($F(2,889)=2.31, n.s.$)は有意でなかったが、時間の使い方の満足度による主効果に有意差がみられた($F(2,898)=37.66, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、時間の使い方の満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。交互作用は有意でなかった($F(4,898)=2.11, n.s.$)。

表 3-2-9 部活動等の所属と時間の使い方の満足度におけるコントロールの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		F 値	所属 3 群 の主効果 多重比較結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
時間の使い方 満足度低群(l)	2.97	0.53	2.93	0.65	2.58	0.79	2.85	0.69		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.29	0.57	3.22	0.59	3.27	0.67	3.24	0.60		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.56	0.70	3.55	0.61	3.52	0.72	3.55	0.64		
計	3.31	0.64	3.24	0.64	3.18	0.78	3.23	0.67	2.31	
時間の使い方の 満足度の主効果									37.66***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表 3-2-10にはコミットメントに関する結果を示した。部活動等の所属 ($F(2,889)=5.71, p<.01$) と時間の使い方の満足度 ($F(2,889)=35.22, p<.001$) の主効果が有意だった。交互作用は有意でなかった ($F(4,889)=0.98, n.s.$)。Bonferroni の法による多重比較の結果、体育連盟群はサークル群、所属なし群よりも有意に得点が高く ($p<.05$)、また、時間の使い方満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。

表 3-2-10 部活動等の所属と時間の使い方の満足度におけるコミットメントの得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		F 値	所属 3 群 の主効果 多重比較結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
時間の使い方 満足度低群(l)	3.14	0.44	3.08	0.56	2.85	0.65	3.03	0.58		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.51	0.51	3.33	0.51	3.28	0.60	3.34	0.53		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.80	0.60	3.56	0.53	3.55	0.66	3.59	0.58		
計	3.53	0.57	3.33	0.54	3.26	0.67	3.34	0.58	5.71**	b<a, c<a
時間の使い方の 満足度の主効果									35.22***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

以上のように、チャレンジとコミットメントに関して、体育連盟群は他の群よりも数値が高いことが明らかとなった。これらの結果は、葛西 (2012) が体育会所属新規大卒者の特性についての調査結果と類似した結果となっている。葛西は文系新規大卒者と比較した体育会所属新規大卒者の優位性として、実行力、達成意欲、貫徹力、チャレンジ意欲が確認されたことを述べており、本研究結果はそれを支持していると考えられる。また、東原 (2008) の論文内においても、体育会神話としての、シゴキに耐える「忍耐力」と負けてもへこたれない「チャレン

「ジ精神」についての考察がなされており、この点に関しても事実として確認できる結果となった。

[村井 剛]

3.2.4 部活動等の所属と時間的能力との関連

部活動等の経験が時間的能力に及ぼす影響を検討するために、部活動の所属(3)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、計画性、時間管理を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表3-2-11には計画性に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果($F(2,891)=0.19, n.s.$)は有意でなかったが、時間の使い方の満足度による主効果に有意差がみられた($F(2,891)=17.80, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、時間の使い方の満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低く($p<.05$)、満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。交互作用は有意でなかった($F(4,891)=0.67, n.s.$)

表3-2-11 部活動等の所属と時間の使い方の満足度におけるの計画性得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		F値	所属3群 の主効果 多重比較結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
時間の使い方 満足度低群(l)	2.38	0.70	2.45	0.73	2.38	0.86	2.43	0.76		
時間の使い方 満足度中群(m)	2.91	0.78	2.69	0.76	2.80	0.85	2.73	0.79		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.04	0.93	3.01	0.88	3.06	0.84	3.03	0.87		
計	2.85	0.84	2.72	0.81	2.78	0.88	2.74	0.83	0.20	
時間の使い方の 満足度の主効果									17.80***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表3-2-12には、時間管理に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果($F(2,889)=0.24, n.s.$)は有意でなかったが、時間の使い方の満足度による主効果がみられた($F(2,889)=34.97, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較の結果、時間の使い方満足度低群は満足度中群と満足度高群よりも有意に得点が低く($p<.05$)、満足度中群は満足度高群よりも有意に得点が低かった($p<.05$)。交互作用は有意でなかった($F(4,889)=1.50, n.s.$)

表 3-2-12 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における時間管理の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		所属 3 群 の主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群 (l)	2.55	0.71	2.35	0.82	2.10	0.78	2.31	0.81		
時間の使い方 満足度中群 (m)	2.65	0.76	2.67	0.74	2.73	0.89	2.68	0.77		
時間の使い方 満足度高群 (h)	3.11	0.88	3.19	0.90	3.27	0.80	3.20	0.87		
計	2.78	0.82	2.72	0.84	2.73	0.93	2.73	0.86	0.24	
時間の使い方の 満足度の主効果									34.97***	l<m<h

1) 交互作用は有意ではなかった。 2) 主効果の検定に用いられた数値は太字で示した。

** $p<.001$, *** $p<.01$, * $p<.05$

これらのことから計画性や時間管理など時間関連の能力は、部活動等の所属との関連性が無い結果となった。時間の使い方の満足度が高いほど、計画性や時間管理の得点が高く、日々の生活において効果的に時間を使っている様子が窺える。

[村井 剛]

3.2.5 部活動等の所属と自信との関連

部活動等の経験が現在や将来の自分への自信に与える影響を検討するために、部活動等の所属(3)と時間の使い方の満足度(3)を独立変数、自己効力感、将来への希望を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった。

表 3-2-13に自己効力感に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果 ($F(2,892) = 1.19, n.s.$) は有意でなかったが、時間の使い方の満足度の主効果は有意だった ($F(2,892) = 24.07, p<.001$)。

交互作用が有意 ($F(4,892) = 3.18, p<.05$) であったため、単純主効果の検定をおこなったところ、時間の使い方満足高群において、所属なし群はサークル群よりも自己効力感の得点が有意に高かった。また、サークル群において、満足度低群は中群、高群よりも有意に得点が低く、中群は高群よりも低かった。所属なし群においても同様の結果が得られた。

高橋・石井 (2008) は大学生活と自己効力感の関係を調査した結果、大学生活においていかに多くの人間と交わることができるか、そして、一皮むけるような体験ができるか、ということが高い自己効力感を得るためにも重要であると述べており、特にクラブ・サークル活動の充実、自己効力感と正の相関があったことを報告している。また、宮杉 (2011) は大学生アスリートを対象にした調査で、アスリートアイデンティティが進路選択自己効力感に正の影響を及ぼすと述べている。アスリートの典型的な達成志向型の高さなど、アスリートの持つ能力・

特徴を考えると、アスリートは、自己効力感そのものが高いことが考えられるが、今回はっきりとした結果は確認できなかった。

三宅ら（2004）は大学生を時間管理能力のタイプ別に自己効力感を調査しており、早期着手で余裕をもって仕上げるタイプと短時間で仕上げる要領の良いタイプは、メタ認知能力と自己効力感が高い傾向があると述べている。このことから、時間管理が上手く、時間の使い方の満足度が高い群は自己効力感が高いのかもしれない。

表3-2-13 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における自己効力感の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		時間の使い方満足度における 所属3群の単純主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群(l)	2.92	0.45	2.78	0.71	2.54	0.97	2.74	0.77		
時間の使い方 満足度中群(m)	3.20	0.63	3.02	0.73	2.97	0.77	3.02	0.73		
時間の使い方 満足度高群(h)	3.38	0.83	3.27	0.77	3.62	0.87	3.36	0.81	4.07*	b<c
計	3.20	0.69	3.03	0.75	3.04	0.92	3.05	0.79		
所属3群における 時間の使い方の満 足度の単純主効果 (数値はF値)			12.98***		24.96***					
			l<m<h		l<m<h					

1) 交互作用が有意だった ($F(4,892) = 3.18, p < .05$) ため単純主効果の検定を行った。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表3-2-14に、将来への希望に関する結果を示した。部活動等の所属の主効果 ($F(2,878) = 0.66, n.s.$) は有意でなかったが、時間の使い方の満足度において有意な主効果が見られた ($F(2,878) = 34.22, p < .001$)。交互作用 ($F(4,878) = 2.46, p < .05$) が有意であったため、単純主効果の検定をおこなったところ、時間の使い方の満足度高群において、所属なし群はサークル群よりも将来への希望の得点が有意に高かった ($p < .05$)。また、体育連盟群、サークル群、所属なし群それぞれにおいて、満足度低群は中群、高群よりも有意に得点が低く ($p < .05$)、中群は高群よりも低かった ($p < .05$)。

これらの結果から、時間の使い方満足度が高い群において将来への希望の高い得点が確認できることから、大学生活に満足している学生は、自分で思い描いた目標を達成できつつある、もしくはできたことが予測される。このような成果があれば、どの所属群であろうと自己効力感が高まり、併せて将来への見通しに自信を持ち、希望の得点が高くなるものと考えられる。

表 3-2-14 部活動等の所属と時間の使い方の満足度における将来への希望の得点およびそれぞれの主効果¹⁾²⁾

	体育連盟 (a)		サークル (b)		所属なし (c)		計		時間の使い方満足度における 所属 3 群の単純主効果	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	多重比較結果
時間の使い方 満足度低群 (l)	2.51	0.62	2.64	0.75	2.49	1.08	2.59	0.83		
時間の使い方 満足度中群 (m)	2.99	0.66	2.91	0.69	2.89	0.83	2.91	0.72		
時間の使い方 満足度高群 (h)	3.46	0.82	3.14	0.77	3.49	0.74	3.26	0.78	4.72**	b<c
計	3.04	0.77	2.91	0.73	2.95	0.93	2.93	0.79		
所属 3 群における 時間の使い方の満 足度の単純主効果 (数値は F 値)	8.15**		14.05***		20.72***					
	l, m<h		l<m<h		l<m<h					

1) 交互作用が有意だった ($F(4,878) = 2.46, p < .05$) ため単純主効果の検定を行った。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

4. 総合的考察

本研究の目的は、次の 2 点であった。第 1 は、大学生生活の過ごし方とコミュニケーション能力、クリティカルシンキング、ハーディネス、計画性・時間管理、将来への希望、自己効力感との関連性を検討し、大学生生活の過ごし方の異なるタイプの学生の意識の特徴を明らかにすることだった。第 2 は、体育連盟に所属する学生をサークルに所属する学生や所属しない学生と比較し、コミュニケーション能力、クリティカルシンキング、ハーディネス、計画性・時間管理、将来への希望、自己効力感における特徴を明らかにすることだった。

大学生生活の過ごし方のタイプに関しては、ヴァーチャル活動群、低活動群、授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群、対人活動中心群の 6 つがあることがわかった。

6 つのタイプの中で、最も特徴的な傾向を示したのはヴァーチャル活動群だった。ヴァーチャル活動群は、インターネット・マンガ・ゲームなどの活動を中心に過ごしている学生である。クリティカルシンキングにおいては、他者に対する真正性と探求心、決断力が低かった。ハーディネスにおけるコントロールとコミットメントも低かった。計画性・時間管理能力も低かった。自己効力感や将来への希望も低かった。実際の対人関係が少なく、ヴァーチャルな活動が多いために、十分なスキルが獲得できにくいのではないかと考えられる。

対人活動中心群は、大学の授業にも平均以上に出席して勉強しているが、対人交際活動に費やす時間が他のタイプと比較して飛び抜けて多く、友人などとの交際を活発に繰り広げている学生である。コミュニケーション能力のうちの関係調整が高かった。他者に対する真正性と探

求心も高く、ハーディネスにおけるコミットメントやコントロール、自己効力感や将来への希望では、6タイプ中で最も高かった。大学生にとってサークル・部活動等での人間関係は多くのことを学ぶ場になっていることが示されているといえよう。

高活動群は、授業で学ぶだけでなく、授業以外の勉強に最も熱心に取り組み、それと同時にインターネット・マンガ・ゲームなどの活動にも積極的で、平均以上に対人交際もおこなっているような学生である6つのタイプの中では、最も多くの活動に積極的な学生だといえる。高活動群は、他者に対する真正性と探求心、証拠の重視が高かった。ハーディネスにおけるコミットメントやコントロール、将来への希望は、対人活動群に次いで2番目に高かった。高活動群もインターネット・マンガ・ゲームに多くの時間を費やしていたが、高活動群ではヴァーチャル活動群のような特徴はみられなかった。

低活動群は、高活動群とは対照的に、全ての活動に費やす時間が平均よりも少ない学生だった。授業にもあまり出席せず、自分で自主的に勉強するということが少ない。対人交際にもあまり積極的であるようでもないし、インターネット・マンガ・ゲームなどにも関心が薄いようである。全般的に活動水準が低い学生のようにも見受けられるが、都筑ら(2012)で見出された授業回避群と同じように、調査時期が7月という学期末だったことから見出されたタイプなのかもしれない。低活動群は、クリティカルシンキングにおける証拠の重視が低いことを除いて、大きな特徴を示さなかった。

自主勉強中心群は、4つの活動の中で、主要には授業以外の自主的な勉強に多くの時間を費やしている学生であり、対人交際や授業での勉強にはあまり積極的ではない。自主勉強中心群は、クリティカルシンキングにおける証拠の重視、計画性が高かった。自分の勉強を進めていくことによって、こうした力を獲得していくのではないかと考えられる。

授業出席勉強群は、授業での勉強には熱心だが、それ以外の活動に費やす時間は平均以下の学生である。都筑ら(2012)でも見出されたタイプであったが、特徴的な傾向はみられなかった。

次に、部活動等の所属に関する結果をまとめてみる。

体育連盟に所属する学生は、コミュニケーション能力における関係調整が高かった。クリティカルシンキングにおける探求心と決断力が高い傾向にあり、ハーディネスにおけるチャレンジとコミットメントが最も高かった。

サークルに所属している学生は、コミュニケーション能力における関係調整と他者との意見の相互調整が高かった。

体育連盟やサークルに所属している学生がコミュニケーション能力において優れていたの

は、そうした活動において日常的に人間関係について実践的に学んでいる成果を示しているといえる。体育連盟とサークル所属の学生間にみられたクリティカルシンキングやハーディネスにおける差異は、体育連盟における活動のタフさ厳しさの影響によるものではないかと考えられる。

それに対して、所属なしの学生は、コミュニケーション能力における関係調整や他者との意見の相互調整が低かった。時間の使い方の満足度低群では、クリティカルシンキングの探求心や決断力が低くなっていた。時間の使い方の満足度高群では、自己効力感や将来への希望が高くなっていた。部活動やサークルに所属していないことで人間関係を調整する機会が少なくなることが、こうした結果をもたらしているといえる。一方、同じ所属なし群においても、時間の使い方の満足度の違いによって、異なる特徴がみられた。満足度高群で自己効力感や将来への希望が高かったことは、彼らが自分の活動場面を見出していることを意味しているのかもしれない。満足度低群において探求心や決断力の低下がみられたことから、こうした学生への対応が求められるといえよう。

以上のように、学生の本分である学業以外の対人的な活動や部活動・サークル活動にかかわることによって学生は卒業後に必要とされる能力を獲得していくことが明らかになった。大学生生活の過ごし方タイプという学生の日常的な行動と社会に出てから必要とされる能力との関係性の一部分を示すことができたといえる。ただし、本研究は、質問紙による一時点の調査データにもとづく分析であり、直接的な因果関係を明らかにすることはできない。縦断的な調査にもとづいて、学生の成長過程を検討していくことが今後の課題である。

[都筑 学]

付記 本研究における調査は、2012年6月12日開催の保健体育研究所倫理委員会での承認を受けて実施されたものである。

本研究における質問紙調査の実施に当たっては、文学部加納樹里教授、経済学部高橋雅足教授、高村直成准教授の協力を得た。ここに謝意を表したい。

文 献

- Benesse 教育研究開発センター (2009) 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報 Vol. 55.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007) コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み。パーソナリティ研究 15: 347-361.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2000) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (1)。日本社会心理学会第41回大会発表論文集: 26-27.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2001) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関

- する探索的研究 (2). 三重大学教育実践総合センター紀要 20: 93-102.
- 葛西和恵 (2012) 体育会所属新規大卒者の特性—体育会学生は企業にモテるのか?—. 法政大学キャリアデザイン学部紀要 9: 293-329.
- 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力」とは http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf.
- 國眼真理子・松下美知子・苗田敏美 (2005) 文系学部生の大学生活満足度・充実度と職業イメージとの関連: キャリア支援のための予備的検討. 金沢大学大学教育開放センター紀要 25: 69-84.
- 三好昭子 (2003) 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発. 発達心理学研究 14: 172-179.
- 三宅幹子・橋本優花里・井上芳世子・森田愛子・山崎理央・松田文子 (2004) 時間管理能力のタイプと、自己効力感、メタ認知能力、時間不安との関係. 福山大学人間文化学部紀要 4: 1-10.
- 宮杉理紗 (2011) アスリートアイデンティティと進路選択自己効力感に関する研究—大学生アスリートに着目して—. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 2010年度修士論文.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—. 京都大学高等教育研究 15: 107-118.
- 森真依子・東條光彦・佐々木和義 (2005) ストレスに強い人格特性について—大学生用ハーディネス尺度の作成—. 発達心理臨床研究 11: 91-95.
- 宗田直子・岡本祐子 (2005) アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討—「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み—. 青年心理学研究 17: 27-42.
- 高橋桂子・石井藍子 (2008) 大学生生活・就職活動が自己効力感に与える影響. 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究 7: 47-55.
- 東京大学大学経営・政策研究センター (2007) 2007年全国大学生調査 第一次～第三次調査基礎集計表.
- 束原文郎 (2008) 〈体育会系〉神話に関する予備的考察—〈体育会系〉と〈仕事〉に関する実証研究に向けて—. 札幌大学総合論叢 26: 21-34.
- 都筑学 (1999) 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討—. 中央大学出版部.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2011) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討. 中央大学保健体育研究所紀要 29: 7-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2012) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (2). 中央大学保健体育研究所紀要 30: 1-33.
- 吉田 寛 (2002) 「クリティカル・シンキング」をどう定義するか. 京都大学文学部哲学研究室紀要 5: 28-39.
- 全国私立大学連盟学生委員会 (2011) 私立大学学生生活白書2011.